まちづくり戦略会議
長谷川美香

１．教育

１）教育はどのような形で地域と連携することが望ましいか

- 地域という範囲はどこまでなのだろうか。小学校区？中学校区？それとも自宅周辺？どう捉えていくべきなのだろうか。
- 日中、地域にいるのはたいていの場合、高齢者。高齢者が無理をしない、精神的にも肉体的にも経済的にも負担が少ないような関わり方を考えることも必要。総合学習のゲストティーチャーなどができるなどあれば、はりあいもあるのでは。
- 世代間交流は必要不可欠だと思われる。それぞれの世代の理解を深めるためにも必要だと考える。（日中、地域にいるのはたいていの場合、高齢者。高齢者同志の交流だけで、世代間まで広がった活動が少ない。ただし、高齢者といっても、60 歳台から９０歳台など幅が広い。）
- 学校行事などから自分の子どもがいる・いないに関わらず参加できるといいのではないか。高齢者サークルなどの発表の場などとして提供してもらえないだろうか。
- 総合的学習の時間において、地域の人などに焦点を当てるような形で、地域が関わることもできるのではないだろうか。→先生と地域のかかわりを深める方策も必要だと思う。先生が地域を知らないというのが関わり方が薄くなるように感じている。
- 小学生などに声をかけると「知らない人に声をかけられても答えてはダメ」と教えられていると、返事をしてもらえないと悲しそうに話す高齢者もいる。また、地域の「おじいちゃん・おばあちゃん」役を買って出たいという高齢者もいるので、世代間交流できる場とその運営を地域で作り上げることも必要。学校内の空き教室の活用なども考えられるのでは？

２）家庭における教育とは

- 社会性のない子どもが増えてきている。「あたりまえだけどとても大切なこと」という本まで出版されている。何をして良いのか。なぜダメなのか。最低限の社会のルールは家庭の教育なのだと思う。
- 叱らない親が増えてきているという。叱り方を親が学んでいるか？不安に思う。
- 「親が叱っても子どもが悪いと自覚しないから、怒ってください」と隣人に言われた。親だけががんばらないように、親の相談を聞く（立ち話程度ができるような）場所も必要かもしれない。

３）若者の地元定着を図る教育の手法

- 「新潟で学べないもの」はあるのか？専門学校数は多いが、それだけで若者が満足しているのだろうか？若者のニーズと合っているのだろうか。
- 若い社会人が方向転換しようとしたときの学ぶ場所も少ない。学べるものも限られている。
- 教育を取り巻く環境を整備していくことも必要。
- 本屋で欲しい本がない。インターネットで購入できるが、購入前に内容を確認できないことが多い。魅力的な本屋も大事だ。
- デザイン関係など感性を磨くというところでは、新潟は刺激が少ないかもしれない。
- 魅力ある就職先があることが大事。たとえば、大学卒業後、語学留学を終えても就職先が見つからない人も多くいる。（企業でそれにこたえるだけの給与を支払えるところも少ないと聞く）しかし、同時通訳ができるような人材は新潟市には乏しく、実際には東京からの派遣となっている。このような現実から「なりたい職業になれる」ために「学べる」ところ（大学）が欲しい。

４）生涯学習

- 高齢者といっても、60 歳台から９０歳台など幅が広い。そのため、新しい動きなどに対しても興味や関心ごとにも違いがある一方、理解が深まらない現状もある。現状の社会の動きとご自分の認識や理解との間に大きなギャップが生まれているようだ。
- 高齢者が高齢者を指導するような動きも必要であったり（パソコン教室など）、若い講師から学びたいといった声も聞かれ、様々なプログラム整備が必要だと思う。
- ただ学ぶだけではなく、社会と関わりたい、人の役に立ちたいというニーズといかにマッチングできるかも課題だと思う。高齢者が社会と積極的に関われる、自信を持ってできるようにするきめ細かなものも公民館など身近なところで学べる工夫が必要である。

２．国際交流

１）「実」のある交流実現

- 既存の組織の強化も必要。
- 地道な関係作りがなかなか成果として評価を受けていない側面もあるように感じる。（北東アジア経済会議など）
- 商工会議所やＥＲＩＮＡなどの活動を支援することも必要かと思う。

まちづくり戦略会議
長谷川美香

２）外国人から見た魅力ある都市

- ＩＮＴＡでフィールドワークをしたときに、新潟の建物・文化・歴史などに触れていただけた。その結果、おおむね好評であった。しかし、英語などの観光ボランティアの人材が不足しているようにも感じられたし、英語表記の案内板、パンフレットなどが不足している。ＨＰなども同様に、英語による新潟の観光施設や交通情報などの情報提供が少ない。ホテルでもＴＶなどを使った英語による新潟の観光案内などもあると助かるように感じる。
- 海外の方にとって日本庭園などは魅力的だと思われるが、すべてがお座敷などでの接待はかなり身体的に辛そうであった。（新潟の良さを見て欲しいという地元の思いがあったとしても、いわゆる日本流を通すことがすべてではないように思う。「おもてなし」そのもののあり方は再考の余地があるように思う。食事においても和食で楽しんで欲しいと思うが、それだけではかなり辛いというのが本音だと思われる）
- ワールドカップのとき、薬局で薬を買うのに苦労している外国人がいた。英語が話すことができないと店員も対応しづらいようであったが、一声かけるだけでずいぶんと印象が違うように思う。（「May I help you?」くらいでいいから声をかけて欲しい！と思った。後は身振り手振りでも大分通じ合える）
- 海外の方がゆったりと自分のペースで公共交通などを駆使しながら、歩いて楽しめる工夫が必要だと思う。（できるだけたくさんのものを見たいという回り方をしているようだ。簡単に、できるだけたくさんの見所があるというのは喜ばれるのかもしれない）
- 日本の花火は海外でも評判が高いという。信濃川のウォーターシャトル、屋形船など新潟の夏には魅力があるのではないだろうか。
- まちなみの美しさ、市場の賑わいなどには関心が高いように感じる。神社での儀式なども興味があるようだ。